

'65 CHEVROLET CHEVELLE

MALIBU 2dr H/T Coupe



エクスタリアはボディカラーからモールディングまでオリジナルのディテールにこだわって仕上げられる。種よく白く塗装された車輪とその裏面に取付いたタイヤもカーブを除けば、当時の真鍮色のホイールと同様変わらない調子にこだわる。



ヘッドライトにはHIDバルブが採用されている。夜間走行などでの作業は当然ながら、視認性にも関して、まさに現代の。



フロントサスペンションはHotchkissのリアリアスプリングは同社製のスプリングローラーアームが採用されている。ブレーキはClass Performance Products社のシステムを導入して輪ディスク化。またリアコイルスプリングなどはH/Tが採用されている。真・シビックアパルトメントはBilstein、リアサスペンションはDANは車高調整が得意なカスタムショップである。各車高調整は、A社が社内のTHUNDERのエアサスを採用して20mmローラーが採用されている。



ボディカラーに合わせてオリジナルのカーゴボックスを完成し、シート生地、ドア・インテリアパネル、カーペット、ヘッドライナーまですべてOEMと同等の品質とプロダクティビティを採用してTVフォームとインテグリス。またインテグリスは、Cassidy's Classic製のステンレスの交換が、Auto Meter製のゲージが設置され、さらに純正のTV付のH400のシステムが採用された。そしてボディカラーはLacquerに交換された上で、クリップ部分が高品質のチタニアに塗り替えられている。真・ヒンターニアガラスはオリジナルのガラスに4mmの厚さを加えている。



エンジンは、350ci V8クワッドキャブター、BlackBook製インテグリスボディパネルと、同社製5000rpmキープレター、Fuelmaster製ヘッドレス、Fuelmaster製マフラーがセットアップされ、イデオンコンパニオンシステムはMIDで後付けされている。真・エアコールドVentage Airのキットが採用されており、コンピュータ制御でドラッグタイムコントロールも備わっている。

"Resto Rod"



ホイールは、American Racingの714のエアロ20インチのホイール。タイヤは、PirelliのP Zero Rの225-45R20のタイヤが採用されている。このように60年代から存在したタイヤを大切にするアイデムは重要な要素のひとつで、このスタイルにも受け入れられるタイヤは少ない。タイヤは、PirelliのP Zero Rの225-45R20のタイヤが採用されている。タイヤは、PirelliのP Zero Rの225-45R20のタイヤが採用されている。

「クルールだろー！」なんて喋っていたりしているのだ。
ところがここに来て、そんなカスタムスタイルがエスカレートし過ぎたことでもあったか、無暗に帰って、オリジナル、あるいはカスタム、オリジナルなホットロッドのデザインを尊重したコンセプトの、プロダクティビティを追求するビルダー、オーナーが目立つようになった。つまり、質問オヤジでも受け入れられるレベルのレスト・ロッドという訳である。この車種維持したのもそんな理由で、クレーン・モーターの導入、ブレーキ、サスペンションのアップグレードおよび大径リムの採用など、昔とは明らかに違うモディファイ、現代の「チューン」を兼ねてきた。車種に「チューニング」が求められるマシンのなかで、詳細はそれぞれの写真にキヤプションも添えて解説させて貰うが、不意にも含めてあらゆる観点から見ると、このスタイルこそが、いま代を担って最も多くのAカーファンが求めるホットロッドなのではないか、と改めて感じるのかもしれない。

アメリカ本国でも、ここ日本でもカーショーやクルーズで、レスト・ロッド、とか「レストロッド」って呼ばれるスタイルが目立ち始めるのが最近の傾向だ。いったいどんなカテゴリーなのかというところ、70年代以前のクラシックモデルをベースに選択したという事、それを後述のようにレストアしつつホットロッド・ビルドしたものだということも、そのネーミングからも分かる。そしてさらにそのプロジェクトにより現代的なセンスとアイテムを採用しているところが大きな特徴である。具体的にその代名詞を挙げると、フェニール、インジェクション化された新世代のハイパフォーマンス・モーターを搭載し、ブレーキやサスペンション、ステアリング系を機能的に直置してアップグレードし、洗練のチーク・リムに扁平タイヤをセットアップする。などなど、無暗なチューンでなく、エアコンをはじめとする快適設備は不可欠である。これは、プロダクティビティ、という言葉が生れた90年代の経験からのムーブメントであり、オールド・デトロイト・アメリカンに新たな生命を吹きかか、という意味では文句なく有義だ。ただし、30年前からAカーとホットロッドに親しんできたベテラン達にとっては、いささか抵抗があるのもまた事実で、フューニッシュしたマシンとのアイデンティティによってはどうしてもセンスを受け入れがたいケースもある。何を懸念する業者もいろいろある。何の代表者でもないが、SEMASHのレポートを見てみるの半分は興味なし、心の中では「これならヤレ切ったオリジナルの方がどんなに